

旗

藏原伸二郎著

特224

949



始



時 224
949



藏
原
伸
二
郎
著

版出堂星金



目次

民族の旗	一
慰問行	四
勇気のある街	七
一碧の果	九
ハイラルにて	二一
アツツ島の英靈に誓ふ	二三
濕原の忠靈	二七
ムソリーニ起つ	三〇
海軍に捧ぐ	三三
まことますらを	三八

いざはやゆきませ(文科生出陣を祝ふ)	三二
海猫と娘	三三
冬の鳥	三五
四十雀	三七
大阿蘇	三九
旅人	四三
きちがひ茄子の歌	四五
立秋	四七
貝塚	四八
相模野	五〇
故郷の山	五三
琅玕の匂玉	五四
虎	五六
小千鳥	五八

雪加	六〇
驛長	六一
風蘭の歌	六三
亡民	六六
監視	六九
岩を掘る人	七一
新しき出發	七三
麥踏み	七六
光る進軍	七八
亡ぶれば山河死す	八一
天誅の絶對を知りて潜伏せよ	八三
海上日出	八七
雲と神(フーゲンビル島沖航空戦)	九〇

歌 謠 篇 三

少年正氣の歌	六四
日本少女の歌	六七
學徒出陣の歌	一〇〇
壯行 の 歌	一〇一
アツツ島玉碎歌	一〇三
全アジア共榮の歌	一〇五
陸輪戰士の歌	一〇八
米英撃滅の歌	一一一
元旦 日出	一一四

民 族 の 旗

今年のやうに雨の多い季節は何か人間の心にまで鬱陶しいかげがさすやうである。爽涼の秋空などまだ幾日もないのである。人間が事毎にこんな自然現象にいちいち影響を受けるやうでは困ることだけれども、生物である以上はどうすることも出来ない點もある。未だ我々も絶えず自然と闘はねばならないのであらう。大風とたたかひ大熱大寒とたたかひはねばならないし、地震雷とたたかひ、内病魔と常に闘つてゐるわけで。これからは敵の空襲ともたたかひ、あらゆる目に見えない敵性國家の陰謀乃至は謀略と闘はねばならない。更に日本人として悲しくも歪められた心中の敵性をもこれを撃滅する必要があるのである。知らずに行ふことなども今日かかる時代にはもはや許さ

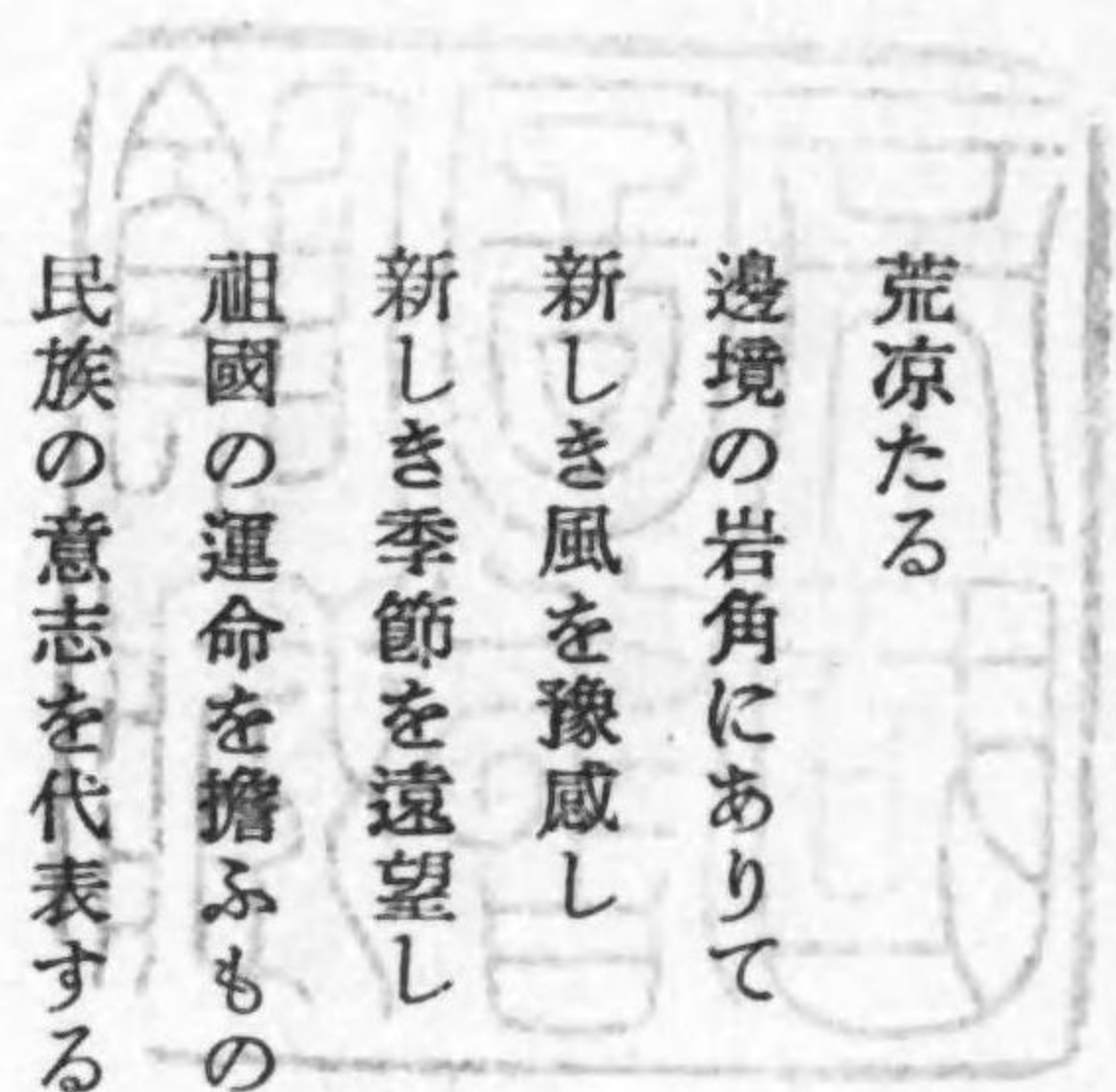
るべきではないのである。生きることとは闘争と同意語である。國家及び民族が常に大敵と闘はねばならぬとすれば、我々は積極的にその目的のために捨身しなければならぬ筈である。それは戦時であると平時であるとの差異は何處にも無いわけであるが、平時に於てはその目的が明確な一つの重點に向はない爲めに、所謂平和産業又は文化面が甚だしい自由主義的享樂主義的面のみを發揮し勝ちであり、終ひには一朝事ある時は立直ることの出来ない迄に廢頽して行く。しかし、今後如何なる平和な時代が出現しやうとも、平時と戦時とを區別するが如き偷安の時世は永久に來ないであらう。永久にはげしい闘ひであり、永久に民族目的への重點主義的方向は強化されなければならぬことを承知すべきである。一ドイツ民族の奮起のみを見てもこのことは明らかである。われら大和民族が永遠に勝ちのこる民族となるためには、ドイツ民族よりも更に深く固い決意が必要である。私はわが大八洲國

の民族が必ず最後迄榮え残り得る民族であることを信じてゐる。または残らねばならぬと信じてゐる。それは神の民族だからである。世界中で最も大義明分を尊ぶ民族だからである。重點とは今日の政治家が發明したものでなく、わが國の歴史が指示する數千年來の明確なわが民族の旗である。

旗

著者略歴 明治卅二年熊本縣阿蘇に生る。慶應大學佛文科卒。
日本文學報國會詩部幹事並ビニ文報企畫委員。翼壯團員。詩人。
著書、詩集「東洋の滿月」、詩集「戰國記」

旗



荒涼たる
邊境の岩角にありて
新しき風を豫感し
新しき季節を遠望し
祖國の運命を擔ふもの
民族の意志を代表するもの
旗
敵に向つて峻嚴なる位置を決定するもの

故郷に向つて愛の通信を發送するもの
旗

絶域の城頭高く

四面敵意の中心にありて

平然と雲にはためき

大陸の風に歌ひ

太陽にきらめくもの

旗

一切の個人的なるものを忘却し

ひたすら勅命をかしこみ奉るもの

旗 尊嚴なる旗

ああ 旗 われらが旗

今や東洋の四邊をゆく

歩武堂々

神のごとき軍隊の

鐵のごとき精神の

先頭にひるがへるもの

旗 大和民族の旗

慰問行

風にふかれ

石につまづき

坂をのぼり

峠をこえて

わがゆくは

相模の原

真南に陽をうけ

静かなる村をすぎ

峽をめぐり

野川をわたり

わが訪ふは

いくた病み給へる

かの傷痍の人

防人を訪はんとす

かの傷痍の人らに

わをれそも何か語り

何をか告げん

自ら内にかへりみて

をこのさたならずや

ああ わが足すすまず

行なやみ

丘の邊に佇ちて看る

大野が原の一角

かの療棟の壁の

白く秋風に光れる

ああ わが心いたむ

勇氣のある街

敵が雲の上からくるとき

われらの街はどんな砦で守らねばならぬのか

そんな敵に對して

お互が狭い壁に閉ぢこもつて

お互に威張り合つて

お互に輕蔑し合つて

それが何にならう。

垣根を取はらひ

四方八方に通路をつくり
くだらぬ自我の城壁を破壊して
たつた一つの意志が
たつた一つの心が
たつた一つの方向を指してゐればいいのだ。
今年もわれらの静かな街に秋がきて
いつも白い雲が浮んでゐて
いつも蜻蛉がとんでゐて
小供達が愉快に遊んでゐる。

一 碧 の 果

高度千 二千 五千
堂々の編隊は忽にして
雲表に没し
敵を見れば必殺
碧落を貫きてこれを撃つ
風速〇〇 速度〇〇
快調の音は天風に鳴り
殉國の志は

北溟におどり 南海に激し

ああ 一碧の果

雲の旗おしたて

日の旗かがやかし

悠忽として有限を貫く

ハイラルにて

大興安嶺を越ゆればハイラルなり

黄塵蒙都を埋めて膝を没す

雁はすでに還り駱駝は出でゆけども

楊柳いまだ開かず胡天なほ寒し

皇師の幾萬北邊を守りてここに鎮す

嚴冬零下四十度に至り

酷熱の猛夏百度を超ゆ

ときに砂塵天地を蔽ひて暗く

萬里の曠野一木なく一人の行くなし
原始そのまま荒涼また索漠たり
ああ 精銳の辛酸は言語の外
只知る報國の一念人力を絶するを
あれを思ひこれを想へば
うたた感激感謝に耐へず
眞夜の旅舎に眠りなりがたく
ひとり窓邊にたちて遠望すれば
満月は中天にあり
ホロンバイル平原は海のごとく
はるかに胡馬の嘶くを聞く

アツツ島の英靈に誓ふ

寒氣骨をゑぐる
不毛の島、北方の絶域、アツツ島！
蒼黒き草原、霧深き天なり
遠山の雪溪のみ不氣味に光り
冷風常に烈しく旗を鳴らすあたり
白夜と薄暮の世界
單調と荒涼のこの濕原地帯にありて
われらの勇士はまさに一歳

敵機の來襲とたたかひ

悪疫、孤獨とたたかひ

ただただ悠久の大義に生き給へり。

大君のため、同胞のため、

まこと言語に絶する艱苦に耐へ給へり、
はるけくもわれらを守り給ひしなり。

昭和十八年五月二十九日、この日ぞ！

一億の同胞よ、よもこの日を忘れまじ！

至尊の兵二千數百の全勇士

今ははや

呼べども答へたまはず

叫べども應へたまはず

雄魂とこしへに絶海の濕原に留り給ふ。

われら皇國に安眠するもの

何の顔あつてか

おめおめ生くるを欲せんや。

然り、

尊き幾多の屍を乗り越え踏み越え

ただ一路

英靈の指さし給ふ彼方へ進軍せんのみ。

悲憤と復仇を飯の一粒一粒に

かみしめ かみしめ のみ下し

われら必ず撃つ！ 必ず撃つ！

親潮と黒潮の渦巻き荒れ狂ふ

北洋の孤島アツツに残り給ふ英靈達よ。
今しばし、ただいまひとときなり、
われらが一大進撃の日を待ち給へかし。

濕原の忠靈

黄花石楠のいろ薄暮に沈むあたり
呼べども 呼べども はや
勇士らは應へず
われらの旗は鳴らず
風啾々として灰色の濕原を渉る
極北の地方！
流水岩を噛み
地衣類のみ徒らに島を埋むるところ

濃霧は海を蔽ひて來り

また山を奪ひて去る

陽はつねに暗しといへども

なほ永劫の時間を貫き生きるもの有り。

風にあらず

霧にあらず

正氣なり

忠義の眞なり

これぞ天地をして慟哭せしむるもの

萬古に不易なるもの

絶対に消滅せざるもの

すなはち

二千數百の烈々たる忠魂にあらずや

草莽報國の志にあらずや

ああ、いま北溟の海に火花と發して光る。

されば同胞よ、忘るることなからん！

勇士らの骨は未だ拾はれずあるを！

悲はよろしく千倍の復仇の後になすべし

怒はよろしく冷徹なる刃の先端に集結すべし

一億の臣民みな死してのち止む！

ムソリーニ起つ

敵に祖國を賣るもの
國民を欺き打つもの
友を裏切るもの
卑怯卑屈なるもの

バドリオ

大いなる意志を持たざるもの
高邁の倫理に生きざるもの
崇高なる國體を知らざるもの

ああ 昨日の友イタリアよ
君が滅亡の姿や哀し

知れ 人心に利己あるとき
その國は已にかくのごとく弱し
國に正大の氣なく謀略の徒あれば
則ちかくのごとくして自ら滅ぶ
イタリアに人なきにあらず
愛國者なきにあらざるべし
早くもムソリーニの立ちて
北邊に據るを聞く

ああ 昨日の友イタリアよ
再び地獄より勇しく立上れかし

われら一億

詔を奉じ

絶対不動の坐に立つ

何ぞ片々たる變化に喜憂することあらんや

敵いよいよ多くして

勇氣ますます振ふは

古往今來 これわが民族の常なり

一意 撃滅に突貫せんのみ

海軍に捧ぐ

昭和十八年四月廿六日

たまたまわれ旅順港頭に到る

海風乳のごとく一天晴朗なり

白玉山頂に登りて想ふ卅八年の昔

旅順港、ああ旅順港

閉塞決死隊の姿

生けるが如くわが胸に現れ

わが心をめぐり、わが魂を打つ

そは皇國を護りたまひ
アジアを救ひたまへる人々
われらが兄上にあらずや
われらが父上にあらずや
今、靜かなる港を見るに及び
涙おのづからあふれ
言ふべき言の葉もなし
おもむろに眼を轉ずれば
松樹山 爾靈山ははや
勃海の赤陽に暮れむとす
山上の岩らみな燦然として
幾多不滅の英靈は

ここに、かしこに
凝乎として眠りたまふなり
明治卅八年五月廿七日
旗艦三笠にひるがへりしZ旗のもと
「皇國の興廢この一戦にあり
各員一層奮勵努力せよ」と
われらの父兄よくその旨を體し
奮勵努力、一死報國、皇國を今日につとう
これ一に廣大無邊なる
御稜威によるは忽淪なれども
また父兄が一死臣節を全うせるによる
父祖の遺訓尙火のごとくわれらが胸に燃ゆ

見よ

山本聯合艦隊司令長官

乙旗を太平洋上に掲ぐるや

わが海軍將兵の意氣まさに天を衝き

忽ちハワイにマレイに、南海に北洋に

敵艦隊を撃滅せり

あゝ、しかれども悲しいかな

昭和十八年四月

われらが提督つひに戦死し給へり

この悲報一たび來るや

同胞一億、寂として聲を吞む

沈黙の敵意は火のごとく燃え

撃滅の決意は盤石よりも固し

然り

山本元帥につづくもの尙一億

敵米英を撃滅せずんば止まじ

撃滅せずんばこの悲みを如何せん

われら皇土を護るもの

遠征の將士とともに戦死せんことを期す

われらが海軍に捧ぐる言葉は

只この一語あるのみ

まことますらを

かしこきやみことかがふり

ひたぶるに出でたつ君は

荒みたま磨ぎたつ君は

劔・太刀腰に取り佩き

その名も云はず いで征く君は

そも たが家の子ぞ

そらみつ大和のくにはみづみづし

あきつしまかも

あきつのごとく

空とぶきみらは

白雲の陽照りかがようあたり

雨雲にいかづちはためくところ

雄々しきかな

雲染むかばねしこのみたてぞと

大君の邊にこそ死なむを

何ぞ告るべき名のあらめやも

千萬に受け継ぎつぎしたぎつ血の

ただそのひとすぢに

日本男子やまとのこの負ひし名のみぞ

その名も云はず

姓かばねも告つらず

かへり見もせず

眉高に 胸高に

大空とほく出でたつひとは

ああ すがすがし

まことますらを ますらたけをぞ

いざ はや ゆきませ

文科生出陣を祝ふ

いと高きみ聲のまぢかに響くを

いかしきみ代の若者たちよ

劍太刀腰にとり佩き

青駒のあがきを速み

いざ はや ゆきませ

治にゐて文仕へ奉る日も

戦の場にい往きたたかふ日も

國守りの防人の只直き心ぞ

やまとおの子のまことは一つ

いざ はや ゆきませ

まつろはぬ者ども射向ふところ

ひたひに矢はたつとも

背に矢はたてじと

雲居立つ海原こえて岩山越えて

いざ はや ゆきませ

わがことの悲しみも喜びも今はなし

大なる歴史の音のとどろきに

勇みたち振ひたち

たつ久米の子の益良健雄のきみら

いざ はや ゆきませ

海猫と娘

天の碧 海の青 五月の風

磯の白濱 海猫の群

あゝ 北海の漁場に勝鬨があがる

敵潜艦がうろつく沖の方へ

漁船は今日も平然と出て行つた

さうして今日も楽しく歸つてくる

真紅な豊旗雲を脊に浴びて

おゝ かへつてくるぞ われらの船が

大漁旗を先頭に

一艘 二艘 また五艘

空には白と黒との海猫鳥の大編隊

濱には栗色をした娘達が

帆のやうな胸を張つて

陸あげおそしと待ちかまへてゐる

空と海とが金に輝く午後の五時

冬の鳥

晴天の峠に來たとき

中の

空あたりで

すさまじい風が起り

一匹の鳥が

碧落から石のやうに落ちてきた

一切の精神は風化して

山脈は白骨となつた

忽ちにして風止み
高原の石たちは
凝然として目を見張つてゐる
冬の枯野だけが
さんらんとして太陽に明い
鳥は再び枯野を發ち
山脈をこえて
光る雲の段層に飛びこんでいつた

四十雀

羽を打抜かれた四十雀が
落葉樹の疎林で
チカ チカ チカ と鳴いてゐる
心配した仲間たちが
何十羽と集つてきて
チカ チカ チカ
チカ チカ チカ
どうすることも出来ないで

只その圍を騒ぎ廻つてゐる

白い雲が疎林の向ふを走り

日暮は早くも丘陵のこつち側を覆つた

チカ チカ チカ

チカ チカ チカ

まつくろい小さな礫が

かずかぎりもなく

飛びあがり舞ひさがり羽音をたて

チカ チカ チカ

チカ チカ チカ

大阿蘇

底つ岩根に燃えたつ炎

とこととはに湧きたつ煙

風にひるがえり虹を吐き

石にふれては雲となり飛ぶ

草千里 岩千里が原ゆ

天にあたりてそびえ立つ

阿蘇は國の穂 鳴神山よ

千古の姿いまにただ見る

一たび激して猛るとき

噴煙天とくらくして

地軸をゆする鳴動は

怒れる神のすがたかも

まことの怒のきびしさは

わが國體の根元に

發してたばしる血潮なれ

歴史をつらぬきちはやぶる

そは菊池一族が純忠と燃え

大宮司阿蘇氏が直心となり
時に神風連が悲願の花と咲き
今又九州男子の名天下之を知る

見はるかす西の方三百里

荒鷲の飛び去るきはみ

守りたちそそり立ちたつ

英彦久住祖母霧島雲仙と

神々の山 向伏すところ

いや高に いや遠に

煙吐き立ち高知れる

大阿蘇山は勇しきかな

旅 人

あれはてた
湖北の野を
歩いてゆく
一人のたびびとがあつた
その精神は砂漠のやうに曠い
だがかれのすがたは
怪奇な岩石の間で
一匹の蟻であつた

日夜風は岩上で叫び
道の邊の古い人骨を吹いた
この歴史のない空間で
人間意識の消滅したところで
白骨は年々歳々風化した
もはや食らん私欲な
青鴉や灰色狼の群さへ
その一本の路を通らなくなつた
あゝ 積石の沙漠！
はるか雪山々脈は雲表にきらめき
屈折した道は山の背を這つて
遠く

胡天の果へ消えてゐる

たびびとは

背中に日章旗をおし立て

ただひとりこの絶域をのぼつて行つた

旗はひゆうひゆうと

たへずはためき

あのなつかしいふる里の笛の音をたてた

き がひ茄子の歌

秋風の中なる

白きみちのべの

きちがひなすび

何ぞわれに採られたる

汝は有毒にして薬草なり

その花の何ぞ幽麗にして

その葉のなんぞ荒々しき

野分ふくこの一季節

ひとりさかんなる命をうたひ

肌さむき落日にむかひて
青く大なる球果をむすぶ
その有効のまた有毒の美しき
寂漠の世にひとり光るが故に
汝はわれにとられたり
逞しききちがひなすびよ
おそろしき汝が猛毒よ
あゝ ねがはくば
わが血脈の詩心の汚毒を制せよ
いま 人かげなき晩秋の
みちのべにたちて
われそのにがき葉を咬まんとす

立 秋

道にまよひ
秋風に追はれて
一日中
孤獨は薄陽とともに
わたしの脊中にあつた

貝塚

貝塚を掘るといやな匂ひがする
三千年の間この動物たちの
腐つた匂ひが抜けきらないのかと思ふと
何か執念のやうなものを感ずる
しかし貝がらなど
昨日のかいがらより美しい色をしてゐる
鹿やいのししや鯨などの骨でいつばいだ
鹿の眉間に石斧が突きささつてゐて

骨の表情が苦痛にゆがんでゐる
あの頃から獣たちに齧齒があつた
夢中で掘つてゐるこのゴミ穴から
ふと顔を出すと
五月の空があんまり綺麗すぎる
松のみどりが強すぎてまぶしいのだ
私の耳たぶを切つて燕が毒矢のやうに翔び去つた

相模野

多摩の横山を越え

小野路をすぎて

相模の國に出でむとす

鶴川村のあたり

小山田のはりみち

霜深くしてりんどうの色濃し

むさしのくにの果なんところ

赤松多き峠なり

風光る峠なり

おお 白雲の湧き出るあたり

阿夫利の山か丹澤か

冬日に照りていかめしきかな

故
の
山

二十幾年ぶりに歸りこし

わが故郷は荒涼たるかな

累々たる火山岩のみ

黒く光り

高原の陽は肌寒くして

山間の小驛に人影もなし

祖先の墓に參らんと

ひとり

風はやき荒野をゆく

これぞこれ

わが出生の黒川村か

重なり波たつ怒れる丘陵

ああ

黒一點

鳥の低く飛び去るあたり

噴煙高く天に吐く

大阿蘇山は

神寂びにけり

琅玕の勾玉

ひと日われ

筑紫なる故郷にかへり

をとめ塚とよばるる丘にのぼる

はるけく煙る松林の中

海の青いや遠くして

潮騒の音全山にどよめり

道のべの赤土のいろ

血のごときうち

ふと見出しは何ぞ

一果の玉 琅玕の勾玉なり

長さ一寸に及ばず

しかも紫紺のいろ深く

歴史のごとく天を映せり

人かげもなき丘なり

鳥かげもなき疎林なり

眞晝の陽あくまで強く

ああ 太古の想ひ

しんしんとわれに來る

まぐはしの筑紫をとめの

そのたくましの胸に光れる

玉

この勾玉

虎

日の出前の

山また山

山の彼方の崖の上に

青き風は吹くなり

そうそうと深き谿間より

風湧き上れば

山上の草らおののきひかる

見よ この寂寥の夜を くつきりと

大空に浮かび

悠然と山嶺を行く 虎

青き虎 足音をぬすみゆく

そう そうと

原始の谿間をめぐり

青き風はふくなり

月のかげ 大地にふる真夜なり

ああ 青き虎 遠音によばえば

山また山

山の彼方の深みより

木精はいんいんとひびき答ふなる。

小 千 鳥

ひろい川原で

千鳥の子は

そこにある幾億の小石の一つにすぎない

それ程色も形も石に似てゐる

遠くで見ると

矢のやうに走つて、すぐ石の間に伏せる

近づくと

忽ち石に化けたつもりで微動だにしない

もつと近づくと

もつと石に似てくる

手を出しても動かない

そつと捕んでも動かない

掌の上のせてもまだ石の真似をしてゐる

そのくせ两眼はかつと見開いてにらんでござる

途徹もない大それた自信家だよ

雪 加

人の頭上に真近く

チラ チラ チラ

神経質に 飛び廻り

鳴きまはり

小うるさく何時までも

追尾してくる小鳥

眞夏の太陽はまぶしく

葭や蘆の葉は尖り

沼地は焼けて

全くこの小鳥の神経戦術には悩まされる

葭の間の小さな巢から

敵の注意を外すために

こいつはこんな戦術を發明した

チラ チラ チラ

金属片のやうに舞ひあがり舞ひさがり

あゝ 忍耐強く追つてくる

驛長

午前二時一分

村を遠く離れた山間の小驛で

白髪の驛長がひとり

小さいランプを打振つてゐる

終列車がたつた今發車したばかりだが

誰ひとり降りて來ないし

たれ一人乗る者もなかつた

風蘭の歌

五月

山に入りて意中の人を求む

意中の人つひにあらず

かの樹上の風蘭に會ふ

深山の幽谷に生じ

朝雲の湧き立つところ

夕ぎりのうづまくところ

蒼々たる老木の幹に坐りて

つねに爽昧の山氣を呼吸し

つねに清新の溪風に浴す

なんぢ深山風蘭よ

その白鷺の舞へるがごとき花よ

その多肉の鮮緑の勇しき葉よ

その神仙の香氣よ

紫の溪流の極るところにありて

何ぞひとりふくいくたる

何ぞひとり悠々たる

わがみやま風蘭

あゝ わが求めし人

山谷に棲みて久しく

つひにかの高邁の草とは化れり

亡 民

何故に汝らは逃ぐるぞ
數千臺の破れた車をひつばつて
ぼろや腐つた道具をいつぱい積んで
何故に君らは故郷を逃亡するぞ
ああ 不幸を泥濘の長き道にひきつり
やかましく罵り合ひ
狂人のごとく叫び合ひ
呆心の身體に眞黒く蠅がたかり

何里も何里もつづく亡民の行列
背中には同族のピストルが光り
落伍するものは殺され
子供達は捨てられ
女らは奪はれ
何の故に
汝らは日軍の來る漢口武昌を逃ぐるぞ
日本軍の來る 眞に神の來るなり
汝らとどまりてその恵みを受けよ
あまりにあまりに無智なる
あまりにあまりに家畜のごときもの達よ
天はつひに汝らを救はざるか

悠久の地はつひに汝らを呼ばざるか
あゝ 草履のごとく汝等の生命は捨てられたり

監視

北方の諸島に冬がやつてきた
海の色はあくまで黒く
陸の色はあくまで冷い
さうして濃霧、寂寥
原始の山脈 蒼白い湖沼
湿地帯の外
どこにも平地はない
雪に蔽はれた

岩 岩 岩ばかりだ

ここで

われらの勇士は

一分間の隙もなく

敵をにらんでゐる

真黒い海をにらんでゐる

濃霧の天をにらんでゐる

岩を掘る人

杳かなる山脈の中から

戛然と響いてくる

あの音は何だ。

日本世界創造の槌音だ。

新しき美、かしこより發掘され、

新しき倫理かしこに躍り出で

あゝ、正義は風のごとく光る。

神の意志によりて
黙々として日本を支ふる
逞しきところ
ここにあり。
岩のごとき人ここに立てり。
あくまで碧い空には
白い雲が浮かび、
その下を一匹の白鷺が飛んでゐる。

新しき出發

朝鮮學徒出陣を祝ふ詩

藍の空が擴がつてゐる
白い雲が浮んでゐる
あれは鶴かも知れない
黄土の丘陵はなだらかに波うち
松林に風が光り
灰色の山道が美しい
山道は君らの故郷へくんだり
またあの晴れた天の方へのほつてゐる

今君らはお召を受け

汚れたものをバスケットにつめて

故郷の土に埋めてきたのだ

いまにして思へば

それは父母にさへ見せられない

不孝のやうなものであつた

不忠のやうな影であつたか

再び故郷を出で峠を越ゆる君らは

あの嶺の松樹の下ではたして何を見たか

うしろにしづかなる故郷の村を見

父母のうちふる遠い掌をみ

前方に純粹なる雲を眺め

さうして深遠悠久なる天を仰いだ

わかき半島の勇士らいまぞ出で征く

大義の旗を古き故郷にひるがへし

正氣の旗を高遠の山河にかがやかし

勇氣凜然と君らは出陣する

げに忠孝は自然を美しくするか

ああ

勇氣こそ本當に君らの故郷を美しくし

君らの父母の心を楽しくする

麥踏み

山國に冬は來りぬ

おごそかに冬は來りぬ

この山

耕して耕してはや天に到る

三たび蒔く麥すでに伸びぬ

ごうごうと吹雪く夜なりき

光りくるめく青き焰の中に

われとわが踏みし麥

この麥

雲凍る今ぞするどし

銃劔のごとく

山頂に並び進めり

光る進軍

嚴肅に季節は運行し
萬物みな本來の様相を呈し
石は石のごとく
松はいよいよ牙え
紅葉また耀く
鶯は後園に來りて鳴き
白雲は軽く 風は疎林に光り
天はその藍の深さを増せり

かくて互に映發してその美をなす
勇士は戦場にその力を振ひ
その精神の極るところに生き
一たび發すれば航母を屠り戦艦を撃つ
その志の示すところ銃後に反射すれば
忽ち一億の心發憤す
工場は盡忠に燃え
鑛山は報國の情にかがやき
農村また感泣して鋤を振ふ
一億の心一に凝結し
只一天を仰ぎ奉る
一億みな臣

一億みな兵

一億みな忠孝

これを太古の姿といはずして何ぞ

真に太古の力と美は

今日この國土に充滿し

天地を照らして進軍する

民族の一大行動を見よ

この秋にあたり

ああ なんぞ省みて

他を云ふことあらんや

國亡ぶれば山河死す

峻嶮なる山道に

日が照つてゐる

風がひるがへつて

岩に苔が光つてゐる

進軍する旗がある

續々と斷ゆることなく

休むことなき民族の大進軍である

營々たる建設の喜悅である

發光する創造の精神のみが自然を美しくする

しかして勇氣は山河をてらし

忠孝は天地を清明にするのである

則ち民族その獨創の力を失へば

山河死す

噫 國亡びて山河何處にありや

見よ

高遠なる東洋の道

風ひるがへり旗ひるがへる

天誅の絶對を知りて慄伏せよ

私は數千年前の祖先達の血が、ここに新しく流されたのを見た。

私は數千年後の子孫がこの尊い血に感奮興起する事を信じてゐる。

わが肉は切るを得べし

わが骨は斷つを得べし

わが忠義は斷じて除くべからず

ああ 四千五百の勇士ら玉碎す

そはマキン島なり、タラワ島なり

絶海の孤島なり 珊瑚礁なり

大濤の雲を咬み天に吼ゆるところ

十有五ヶ月の長きに亘り
棲むに定家なく飲むに清水なく
食物また缺乏す

只生きること已に人間業にあらず
しかも雲霞のごとき醜夷の來り犯すや
寡兵よくこれを邀へ撃ち

憤然として敵橋頭堡に突撃す

終日終夜巨大なる爆弾は雨のごとく降り
艦砲弾また霰のごとく來る
ために島景はその姿を變貌し
岩礁ごとごとく焼け草木皆枯る

ああ 皇軍の死闘幾晝夜ぞ

突撃更に突撃

身に數彈を受くるも屈せず
一人よく敵の數百を斃し

満身の創夷滿眼の血

息絶ゆといへども尙敵に向つて立つ

これぞ眞に勅命を奉じて鬼神の怒り給ふなり
その間敵の作戦を粉碎し敵の時を奪ひ
敵艦隊を撃滅し

以つて神國の必勝不敗を顯彰せり

この神人に跪き慟哭するものアシア十億
この勇猛につづくもの尙一億ありて存す
敵米英何するものぞ

醜虜の焦燥はわが期するところ
汝ら遠からずして
天誅の絶對を知りて憎伏せよ 滅亡せよ

海上日出

満月すでに落ち
星また影あはく
風なく
黎々たる波の聲のみ
凜冽の曉闇なり
大海原の只中
戰略の極點にありて
威風堂々

わが聯合艦隊は集結す
大山の動くがごとく
まさに出撃せんとす
このとき
東方水平線上に微光あり
則ち一闪すれば
雲は紫に映え
紅色と變じ
金色に光り
白金光線となり
忽ち八紘に放射す
わだつみは

さんらんと輝き
天また明昭々
ああ 大日輪の
海上に出で給ふなり
敵撃滅の年いまぞ明く
見よ
神彩陸離として
わが軍艦旗のはためくを
必殺の闘志鋼鐵のごとく
宇宙の正氣あつまつて
彼處に凝結せり

雲と神

ブーゲンビル島沖航空戦

(我方の損害、驅逐艦二隻沈没。巡洋艦二隻小破。自爆未歸還百五機。)
神國の永遠に生きる道は、ああ

かくも崇嚴な血によつてのみ切開かれてゆくのだ。

私は三日三晩、ブーゲンビル島沖航空戦の詩を

考へて、遂に一字も書けなかつた。その間、第三次、第四次の大本營發表を聞いた。

第五次、第六次と、激戦は更に凄烈の度を増すだらう。

そのたびに、われらは、大わだつみを照らし、高天原をてらして光る神を

見た。

眞紅な積亂雲の果に突入する神々をみた。

(瞬時にして大渦巻が起つて、敵一大艦隊が海底に沈み去つた。)

一億、みな草のやうに地にひれ伏して祈つた。

人々は、この光るものが、何であるかを知つてゐる。

だれでも、口には出さぬが腹の底にちやんと知つてゐる。

有難さに、尊さに泣いてゐるのだ。

雲には幾つもの層があつて、その光る部分に、大勢の軍神たちの行列を仰ぐのである。

ああ、光り、天降る神たち。

歌
謠
篇

少年正氣の歌

(一) 青雲のたなびくあたり

白雲の湧きたつところ

富士が嶺は天にひかりて

雄々しくもごどしく立てり

いかしく立てり

(二) 日の本の大やまとなる

丈夫が子ぞわれらみな

岩走る眞水のごとく
勇ましくすがすがしくも
生ひ立ちゆかん

(三) その心いよいよ清く

その力いよいよ強く

師の君のみちびくままに

國のため捧げむ時を

指をり待たん

(四) 大八洲中つしまなる

神ぐにの子ぞわれらみな

かなしみもまた苦しきも
何のその來らば來れ
踏みこえ行かん

(五)

瑞穂なる豊葦原の
日のくにの子ぞわれらみな
ちちははの訓かしこみ
ひとすじにわが大君の
邊にこそゆかん

日本少女の歌

(一)

日出づるあたり東海の
潮満つ玉とかがやける
やまと男の子の雄々しさは
華々しきこそ勇ましき

(二)

清く明るき神州に
まことの花と咲き匂ふ
大和少女のゆかしさは

人知れずこそ美しき

(三)

ああ 米英を撃つべしと
みこと降りて早みとせ
敵撃滅の時ぞくる
見よ戦ひの凄さまじき

(四)

國を護りて何千里
千島の果にソロモンに
日夜隙なき激闘を
偲べばみいつの有難き

(五)

撃つべきものは敵なれや
少女といへどこの秋に
生けるしるしの有るごとく
日日の務めに勇むべし

學徒出陣の歌

(一) 學びの友よいざさらば

大詔燦とかがやくを

學徒の力これ見よと

出で征く心燃ゆるかな

(二) 學びの友よいざさらば

大義に生きる日本の

久遠の歴史うけつぎて

いま光榮の時いたる

(三) 學びの友よいざさらば

大空たかくひるかへる

萬古不滅のわが旗を

敵陣ふかく打建てむ

(四) 學びの友よいざさらば

大進軍の音ひびく

つづけよ友よわが後に

戦の場に君を待つ

壯行の歌 (各節に對す)

いで立つ友よいざさらば
ますら丈夫の出陣の
ああ 堂々と勇ましや

アツツ鳥玉碎歌

(一) 知れ北洋の絶域に
玉と碎けし勇士らの
遺恨は骨に徹したり
ああ 憤激のアツツ鳥

(二) 聞け啾々と風吹けど
濃霧に沈む濕原に
應へる聲の絶えてなし

ああ 凄絶のアッツ島

(三)

見よ天日も薄ぐらき
不毛の島にかがやける
萬古不滅のいさをしを
ああ 忠烈のアッツ島

全アジア共榮の歌

(一)

滿洲國よ蒙古よ
中華民國よ泰國よ印度よ
フィリツピナよビルマよ
全アジアの諸民族よ
ああ 偉大なるアジアよ

進撃せよ

(二)

われら共によろこび
われら共に悲しみ

われら共に手をつなぎて

われら共に榮へん

ああ 勇敢なるアジアよ

進撃せよ

(三)

天上に輝くわが太陽よ

東洋に榮ゆる人々よ

美しき祖先の雲よ

尊き子孫の山脈よ

ああ 高遠なるアジアよ

進撃せよ

(四)

われらがアジアは一なり

われら今ぞ堅く誓はん

かの共同の敵を撃ち
新しき共榮の地を創らむ
ああ 神聖なるアジアよ

進撃せよ

陸輪戦士の歌

(一) 第一線の皇軍と

ひとしき使命いただきて

日夜たたかふ陸運の

戦士百萬火と燃ゆる

(二) 青き焔の吹雪く夜も

酷熱鐵を焦す日も

敵撃滅の意氣高く

見よ必勝の輸送陣

(三) 送れよ彈を飛行機を

北に南に大陸に

この一日が勝敗の

わかるる時と思はずや

(四) 生せよ時を天の時

はや決戦の年きたる

烈々忠義に徹すれば

何の不能かこれあらん

(五) げに日本は神の國

鐵車もよりにて仕ゆるか

まらす丈夫のいかるごと

疾^{はし}る姿の勇ましや

米英撃滅の歌

(一) 敵べいえいを撃つべしと

みことかがふり早みとせ

しこのみたてと出で征きて

のりのまにまに身を捨つる

大和男子のいさましき

(二) 世界はひろしいなせまし

みよ皇軍の征くところ

幾つの國ぞはた海ぞ
踏みゆく極みはてもなし
すめらみいつの畏さよ

(三)

鬼畜のごとき反撃の
その烈しさをはねかへし
萬古不動の精神を
いま必殺の劍にして
ああ撃滅のとききたる

(四)

いざ一億よ部署に着け
總員すすめの號令に

おくれはとらじとらせじと
火花と燃ゆる草莽の
こころぞあかしすがすがし

(五)

十二月八日のみことのり
地に伏し天を仰ぎ見て
泣きて聞きたるわれらかも
草木も聞けよ石も聞け
うちてし止まむやむべし

元旦日出

雲飛ぶあたり

東ひがしの

大わだつみに

日は昇る

聞け凜烈の

元旦に

鉦打つ音の

はげしさを

決戦の年

今ぞ明く

撃つべきものは

敵なれや



詩集 旗 奥付
 定價 九十五錢
 特別行爲稅 金五錢
 相當額
 合計金 一圓

出版會承認 320009 號

昭和十九年三月十五日印刷
 昭和十九年三月二十日發行

(三、〇〇〇部)

著作者

藏原伸二郎

發行者

福岡益雄

印刷者

鈴木芳太郎

印刷所

玄眞社印刷所
 (東京一三)

發行所

金星堂

東京都神田區錦保町三丁目二番地
 會員番號 一〇七〇二〇番
 電話九段 四〇六八番
 振替東京 三三二八番

配給元 東京都 田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

陸軍報道班員 豊田三郎著

B 六 判 税込二圓十銭價

長篇 小説 行軍

この小説は、ピルマ作戦に從軍せる報道班員の名状を、多からざる勞苦を描いたもの。今最大の收獲とせしめて、白眉の位置に置かれた。中、或る種反響を捲き起せる長篇小説。

陸海軍報道班員として戦線を馳

驅せる二作家の歸還第一小説集

小説集 敵 (てき)

セレベス作戦、サマタ作戦、パリツツクバ作戦、ガダカ作戦、洋各戦等。指に餘る世界戦史に、その南太平洋戦を、挺身從軍せる著者が、小説を以て報告した。もの銃後國民に贈る海軍作戦報告。

海軍報道班員 寒川光太郎著

B 六 判 税込二圓價

444
295

終